

2Tp-1 明治初期の家政書にみる欧米家政理念の受容過程と現代的意義

—『経済小学 家政要旨』を中心にして—

○谷口 彩子*, 亀高 京子** (*尚絅短大, **東京家政学院大)

(目的) 明治初期の翻訳家政書の1つである『経済小学 家政要旨』は、わが国の家政教育、家政学研究に多大の影響を及ぼした。すでに筆者らは、同書の原典を解明し、原書と訳書との比較考察を行った。今回の研究では、翻訳者永峯秀樹が日米の生活文化の違いを考慮し、取捨選択しながら訳出した家政理念や内容が、当時の社会背景や生活文化のなかで、わが国の家政書にどのように受容されたのかを検討し、わが国の家政学成立史上において『家政要旨』が果たした役割とその現代的意義を考察することを目的とする。

(方法) 資料として、ハスケル原著、永峯秀樹抄訳『経済小学 家政要旨』(明治9年刊)、他に小林義則編輯『男女普通 家政小学』(明治13年刊)、青木輔清編述『家事経済訓』(明治14年刊)など明治10年代に刊行された家政書をあわせて用いた。

(結果) 『家政要旨』に訳出された「家族の健康と爽快と幸福」を目標とする家政理念、科学的・合理的な家庭管理のあり方は、当時の家政書に影響を及ぼし、受容されていた。それはこの家政理念を受容可能とする本質的・文化的下地がすでにあつたためと考えられる。一方『家政要旨』の中の食品成分表は、食品の科学的分析手法が未発達であったこの時期の家政書に受容されていない。日本的家政書は、翻訳家政書の家政理念と伝統的なわが国の生活文化とを折衷する役割を果たした。この日本的家政書にみられる生活規範のなかには、資源保全を目的とした生産と消費の仕方、天災に備えた自衛手段、後世への配慮と責任など、今日の高齢者問題・環境問題に関して学ぶべき点がみられる。